地方史誌の恩恵

文芸学部助教授　胡桃沢　勘　司

1. 刊行隆盛の経緯

本学中央図書館には、全国各地の地方史誌が多数架蔵されている。地方史誌とは、ある特定地域の歴史や文化について記述した本である。「地方」という言葉からは、たとえば私の郷里の信州のような所が連想され、東京や大阪のような大都会は除外されると思う方も居るかもしれない。しかし、この場合は、大都会に対するそれ以外というのではなく、国全体に対する特定部分というほどの意味なのである。よって、大都会となっている所も地方史誌の対象地とされ、現に『大阪市史』が存在をする。編纂は、該当地域の自治体が公費を投入して行うケースがほとんどだが、実際の作業は現地の事情に通じた専門研究者に委託して進められるのが通例だから、学術的にも価値の高いものが多いのである。その恩恵に浴している者の一人として、これに関わる一文をとの御依頼を頂いたわけだが、まずは今日このように多数の地方史誌が発刊されるに至った経緯から話を始めることとしよう。

第二次世界大戦前における我が国の歴史研究は、国民の大多数を占める一般庶民のそれについても行われないわけではなかったが、主とされたのは天皇・公家・将軍等々一部上層者を対象としたものであった。したがって、取り上げられる地域も、畿内・関東など時の中央政府の所在地周辺に片寄りがちとなったのである。一国の歴史を考える場合、時代を動かしてきた人々やその活動拠点について検討を加えるのは、言うまでもなく必須事項である。これの重要性を否定する歴史家は居ないが、見落としてはならないのは、そこに登場する人や所は言わばその時代の代表に過ぎない、ということだ。およそ何か物事をなすには、多数の人間の結集が必要とされる。たとえば電車の運行は、外見上は運転士と車掌で行われているが、決して目立つところに居る彼らの力だけですべてが運ばれているわけではない。送電をする変電所、線路の保守、車両の点検・整備等の部署で、日夜多くの担当者が汗を流している。それらの作業が総合されて、初めて電車は走ることが可能となる。運転士と車掌は、走行を司る代表者として我々の眼前に居るのである。

思うに、歴史上時代を動かしたとされる人物は、丁度この乗務員と同じ位置に居たと言うことが出来るだろう。最終的には彼らが「ハンドル」を操作したわけだが、その前提として、表には見えにくい多数の人々の地道な活動が存在をしたのである。しかし、前述のとおり、第二次大戦前の歴史学界においては、彼らやその活動地域が対象とされる機会は必ずしも多いとは言えなかった。これは、一つには時代の制約があったからだが、戦後それから解き放たれると、その部分に注目することの重要性が、歴史研究者はもとより、一般からも叫ばれるようになってくる。代表者のみでなく、国民全体としての歴史研究を、との流れになってゆくのである。この潮流に乗るならば、研究対象地も、特定地域に限ることなく、全国津々浦々に及ぶのが当然との認識が抱かれるようになってくる。かかる大きなウネリを受ける形で、国土の細胞とも言うべき各地方自治体では、自らの管轄地に関わる史誌編纂の機運が高められることとなった。その結果、全国規模で、多数の都道府県・

市区町村史誌が発刊される事態となったのである。

2. 研究との関連

それでは、私自身の研究と地方史誌の関連について、述べてみることとしよう。

私の専攻分野は日本交通史だが、法皇の熊野詣でや大名の参勤交代といった上層者のそれではなく、たとえば近江から京都へ物資を運んだ馬借のように、農民が駄賃稼ぎとして行った馬や牛による輸送の実態はどのようなものであったのかといったことを、むしろ主な対象として研究している。これの実践にあたっては、山間地帯における実地調査が不可欠である。というのは、明治維新以降、都市部に比べ、かかる所では近代的交通機関の導入が遅れ、比較的後年まで前代の姿が残されていたため、実態の把握がしやすいからである。手掛けてみたい所は全国各地にあって、毎年1～2ケ所ずつを選んでは出掛けるが、ただ闇雲に行けば良いというものではない。実地調査に入る前には、一定の準備が必要とされる。それは、訪ねようとする対象地の状況を予め把握する、ということなのだが、その際何にも勝る情報源となってくれるのは、該当地の地方史誌なのである。

現地調査に入る場合、大切なのは、自分の直接の専攻分野のみでなく、関連事項について一通りの知識を得るよう心掛ける、ということだ。特に、作業の基本単位となるムラに関わる事柄は重要である。ムラは、現行の行政村としてのそれではなく、行政区画の大字に相当するもので、近世、幕府の支配体制の基礎をなすものとして形成された。元禄期頃には全国に6万以上あったと言われているが、このムラを、私は一回の調査で数カ所訪れるのを定石としている。ある街道について研究するには、所々に設けられた要所（原則としてムラ単位で指定される）を出来るだけ数多く見ることがデータの精度を高めるからだが、まず気をつけなければならないのは、各々のムラが誰の支配下にあったのか、ということである。というのは、当時は、特定エリアを一人の大名が支配し、周辺一帯のムラは全てその支配下にあるというケースも見られたが、逆に、一本の街道上でも、あるムラは○○藩領、隣は天領、その隣は△△旗本領、といった具合に錯綜している例もよくあったからだ。距離的には近くとも、支配者が異なれば、当然様々なところで違いが出てくるものである。それを知らずに作業を進めるのは、間違いの元となりやすい。だからまず最初に押さえておかなければならないのだが、地方史誌は、これについて詳細なデータを提供出来るよう仕上げられているものがほとんどなのである。

生産力に関わる記述も重要である。近世、ムラの生産力は米の収量に換算した石高（1石＝180ℓ）で表示された。公式的には、人口に比べてこれの数値が高い所は豊かで、低い所は貧しいということになるが、必ずしもそうは言い切れない側面がある。たとえば、人口500人に対し、石高が50石と表示されているムラがあるとしよう。当時は、一人分の食料として1年に米1石が標準とされたから、その計算でゆけば、このムラはとてつもなく貧しい生活を強いられていたということになる。しかし、実際には額面どおりでは生きてゆけるはずがないから、何か別の手段で収入を得ては、食料を購入していたと考えるのが順当だということになってくる。そして、別の手段の有力なものの一つが駄賃稼ぎであったのだ。すなわち、交通史の調査を行おうとする私にとって、かかるムラの存在が地方史誌上で確認されるならば、それは農業よりむしろ交通労働に依存していた可能性の高い所であるのが示唆された、ということになる。訪れてみるべき対象として浮上してくる、ということとなるのである。

近世の交通路について調べる場合、道中のどこに宿場が設置されていたかは重要事項である。東海道や中山道のような幹線道路ならばすぐに分かるが、地方の街道についてはこれがなかなか難しい。私は、1998年には、

牛追い唄で知られる南部の牛輸送の研究のため、盛岡から北上山地を横断して三陸海岸へ向かう道の調査に赴いたが、その際道中のポイントを教えてくれたのは、『岩手県史』をはじめとする地元の地方史誌であった。幸いかなりの部分が本学図書館に架蔵されており、居ながらにしておおよその輪郭を把握することが出来たのである。

3. 編纂事業への関わり

我々歴史家にとっては、地方史誌は単に読む対象としてのみあるのではない。前述のとおり、作成の主催者は自治体である場合が多いが、実際の作業は専門研究者に委託するのが通例で、私自身いくつかの編纂事業に参加の機会を与えられた経験を持っている。すなわち、より能動的な形で関わり合う場面も存在するのである。

編纂に取りかかる際、最も基本的な問題として議論の対象になるのは、① 地域の歴史を住民に分かりやすく説くのと併せ、② 学術的にも価値有るものに仕上げるとの、言わば二律背反的な仕事をどう進めるのか、ということである。無論最初からどちらか一方についてのみ行うというケースもあって、この時は我々も初めから割り切って仕事を進めてしまう。しかし、「二兎」を追う際は、予め主催者との間で十分調整をしておかなければならない。というのは、彼らは立場上 ① 優先の希望が強いのに対し、研究者側はむしろ ② に比重を置きたいとの志向を持つ者が多いからである。この事態に対する最もポピュラーな対策は、① に沿った解説的な本（「通史編」と呼ばれることが多い）と、② を満たす資料編とに分けて出す、というものだ。① は、古い時代から現代に向け、年代を追って、出来るだけ平易な文章で書くことが要求される。これの記述を担当する者は、論文等で使い慣れている学術用語を使うことを極力避けなければならず、「やさしく書く」ことの難しさに苦しめられるのである。ちなみに、私は「前近代的輸送体系」という言葉を使って、書き直しを求められたことがある。一方、② は埋蔵文化財の図面・古文書・民俗資料の記録等を集成したものである。これは、その筋の専門家が見なければ何のことか分からないが、文字通り学術文献として高い価値を有している。研究者にとっては、垂涎の的となるものも多く刊行されているのである。

修史事業は、基本的に、それをやったから直ちに目に見えて効果が有る、といったものではない。ただ、時によっては、その地域に思わぬ平和をもたらすこともある。私が承知している例は、対象地内にある二つのムラが争っていた山林の所属に決着をつけ、紛争が解決したというものだ。近世はこの種の争いが頻発し、山論と呼ばれたが、当事者同士で解決出来ない場合は領主が調停に乗り出し、その内容を裁許状と呼ばれる文書に記して関係者に渡していた。以後は、これに沿って対処するよう申し渡すわけである。現在の法律の専門家によると、裁許状は今でも有効と認められる場合が有るという。該当地は正にそれで、編纂事業の過程で見出された古文書が根拠として採用されたため、双方共に納得して矛を納めたというのである。かかる一件は、編纂関係者にとって良い意味での副産物なのだが、図らずも地域住民が歴史的経緯を案外重く見ているのが露呈されている。事業の意味が、再確認されたということが出来るだろう。

4. 歴史教育への寄与

最後に、地方史誌と歴史教育の関わりについて述べてみたい。

既述のとおり、地方史誌は、長期間にわたって多額の費用をかけ、しかも現地の事情に通じた研究者の参加を得て編纂されるケースが多いから、内容は精度の高いものが大半である。加うるに、データベースを、単に文字史料に限ることなく、埋蔵文化財や民俗資料にも求めるのが通例となっているから、広範な形でその土地の歴史展開を知ることが出来る。該当地域の住民にとっては、歴史を最も身近

に感じさせてくれる本だと言って良いのである。これは、若い学生についてもそうだと言うことが出来る。具体的に説明をしてみよう。

私は日本史の教師として学生と接しているわけだが、毎年一番苦労するのは1年生の授業である。というのも、学生の大多数が、正に前述の代表者の羅列を暗記するのが歴史の勉強だと思い込んでいるからだ。全国レベルで記述される傾向が強い高校までの教科書の影響によるものだが、その状況は、「歴史が好きだから」と基礎ゼミに入ってくる学生でも、4月の時点ではほとんど変わりが無い。学問としての歴史はそうではないことを理解させるのが1年生教育の課題となっているのだが、総纏めとして学年末に「身近な歴史」についてレポートを提出させるのが恒例となっている。これは、具体的な内容は何でも良く、とにかく学生自身が身近だと思うものを取り上げるよう指導している。したがって、たとえば自分の趣味 —— 音楽など —— を対象とする者も居るが、量的に多いのは、やはり現在の居住地もしくは郷里に関わる歴史事象を取り上げたものだろう。その際、特に私がアドバイスをしたわけでもないのに、関連の地方史誌に目を通してくる学生が居る。そして、彼らが共通に感ずるのが、記述内容の意外なほどの身近さなのである。

この場合、関西以外の地域出身の者の「感激」の度合いがより高い。それはそのはずで、今更言うまでもなく、関西各地の地方史は国家全体に関わることと重なり合う場面が数多い。例を挙げれば、西暦663年、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に破れた朝廷は、もしも大陸からの進攻があった際、大和を守る砦として河内との国境の高安山に城を築いたが、その地名の高安は鶴橋駅から乗る近鉄電車の行先としてお馴染みのもの、といった具合である。必然的に、関西出身の学生は、地方史誌類に接する機会を持つ前に、教科書等で身近な歴史的事象を相当数目にしてきている。自らの近くで起きた事柄が取り上げられる事に、言わば免疫が出来上がってしまい、気持が高揚する程度はさほどではなくなってしまっているのである。対するに、関西以外の所出身の者は、地域の事が国家全体とオーバーラップする頻度が少ないことから、自身の卑近な過去を取り上げた著作に親しむチャンスが、とりわけ受験に追い立てられる世代においては限られてしまっている。極論すれば、彼らは、日本の歴史は畿内や関東のことを書き連ねるものだという、錯覚に陥ってしまっているのである。そういった状況に置かれていた者が、偏差値の呪縛から解き放たれ、自らの土地にも営々と歴史が積み重ねられてきたのを知らしめてくれる書物を手にした時の新鮮さは、何とも言えぬものがあるようだ。これが、前述の「感激」の度合いの高さとなって表れるのだが、学生のなかには、郷里を見直し、新たな誇りを持つようになる者も見受けられる。延長線上で、卒業論文のフィールドとして取り上げる者も後を絶たない。正に、地方史誌がもたらした教育効果というべき事実だろう。そして、教鞭を取る一人として思い起こすべきは、本学図書館の多数の地方史誌は全国各地出身の学生への恩恵を可能としている、ということだ。格別歴史を専攻するのでなくとも、興味が湧いた時、あるいは何か必要が生じた時には、何時でも手に取って見ることが出来る。地味ではあるが、教育上の大きな財産と位置づけて良いものなのである。